

第1回 高齢者及び障がい者の社会参加促進等に関する検討会 会議録

日時等

- 1 日時
平成30年4月24日(火) 10:00～11:45
- 2 場所
熊本市役所議会棟2階 議運・理事会室
- 3 出席者
荒木委員、池永委員、小林委員、澤田委員、永田委員、西委員、干川委員、水野委員、
溝上委員、山田委員、山中委員 (欠席者) 越地委員

会議の概要

- 1 開会
- 2 委員委嘱
- 3 局長挨拶
- 4 委員紹介
- 5 職員紹介
- 6 正副会長選出
高齢者及び障がい者の社会参加促進等に関する検討会設置要綱第5条第2項の規定に基づき、委員の互選により、澤田道夫委員が会長に選任され、同項の規定に基づき、小林寛子委員が副会長に指名された。
- 7 議事
 - (1) 検討会の設置について
【資料1】の内容に従い、検討会の設置について事務局から説明が行われた。
 - (2) 高齢者及び障がい者の社会参加促進等について
【資料2】の内容に従い、高齢者及び障がい者の社会参加促進等について事務局から説明が行われた。その後、【別紙1】のとおり、各委員から質問や意見が出された。
 - (3) 検討会の今後の進め方について
【資料3】の内容に従い、検討会の今後の進め方について事務局から説明が行われた。
 - (4) その他
次回の検討会について5月下旬頃に開催することとし、事務局において各委員の予定を確認の上、通知することとなった。
- 8 閉会

澤田会長：

それでは、議事を進めていきたいと思います。まず、事務局の方から説明をお願い致します。

事務局：

(【資料2】の内容に従い説明)

会長：

何かご意見・ご質問あればお願い致します。

溝上委員：

おでかけICカードについて保有率が低いようですが、本人が「いらぬ」と言って、これを貰われていないのでしょうか。全員が持って、あとで使うか使わないかは、ご本人が選ぶというふうにならぬと、最初からいき渡っていないなかで、その理由も判らぬというのであれば、どこに踏み込んだらいいのかがよく判りませぬ。ICカードの保有率について、何故こんなに低いのか、お分かりになる範囲で教えていただければと思います。

事務局：

高齢者につきましては、到達年齢になられますと制度案内の葉書を全員の方に送付をしておりますけれども、やはり自家用車等を利用される方が増えてきたといったことがあろうかと思っております。昨年実施したアンケートにおいても、おでかけICカードを持たぬ理由について、「自分で自動車を運転しており、バス・電車は利用しないため」というのが最も多くて、36.5%の方がそのように回答しております。続いて「家族や知人等が運転する自動車を利用しているため」という方が31.4%という状況です。

また、障がい者の方の移動支援については、他にも制度があります。福祉タクシー券だとか燃料費助成だとか、障がいによっては、最初の前提として、「もうバスを利用しない、できない」と、そういったことでタクシー券の申請はするけどさくらカードの申請はされぬ、という方もいらっしゃいます。

いずれにしても、さくらカードやおでかけICカードの交付を受けるためには、写真を撮って区役所に出向いて窓口で申請をする手続きが必要なものですから、最初から「自分はバスを利用することはない」と思われる方は、その辺りの手続きを面倒がられて、申請されぬ方もいらっしゃるのではと思っております。

澤田会長：

さくらカードの制度について確認ですけれども、利用者の負担割合というのは平成16年度に1度利用者負担分の導入がされて、それ以降今まで変更はなかつたという理解でよろしいでしょうか。

事務局：

利用者負担についてですが、平成16年4月に、今後の対象者の増加、交通事業を取り巻く環境、それと市の財政状況等を考慮して見直しが必要ということで、平成16年度から高齢者2割、障がい者1割の利用者負担を導入したという経緯がございますが、利用者負担につきましては、それ以降変更はありません。

なお、障がい者につきましては、以前は2,000円を払えば1年間市内は乗れるというおでかけパス券という制度がありまして、このパス券の2,000円の積算根拠は、1年を通じての利用の総運賃1割相当ということで考えていたわけですが、当該制度における実際の負担割合というのは不明というところはございます。

干川委員：

おでかけ IC カードの障がい者の利用のところなのですが、資料によると501回以上使っている方も何人かいて、通勤とかで使ってる人もいるのかなと思ったりするのですが、そこら辺は高齢者とちょっと状況が全然違うのかなと思ったりするのですが、もし分かる情報があればお願いします。

事務局：

資料にある501回以上の利用についてですが、これはA型B型の事業所に通われている方がいらっしゃいますので、その辺りの方々の実態ではないかと考えております。

西委員：

事業所に通っている障がい者の方の中には、何万円という負担をしながらA型B型の賃金の低い事業所に通ってらっしゃるということで、事業所の賃金よりも、多くの運賃を払わなければならない方がいるという現状もありまして、この辺も今後検討会の中で意見を述べさせていただきたいと思っております。

会長：

ほかにご質問やご意見はありますか。

荒木委員：

社会参加に関するアンケート結果においては、「参加していない」と無回答というものが圧倒的に多くて、全国的な傾向ではあるとは思いますが、この参加していないことの理由と伺いますか、そういったこと或いは無回答の方が3分の1以上はいらっしゃいますので、何かそこら辺の参加していない理由とか分かるのであれば教えて下さい。

事務局：

当該アンケートは、くまもとはつらつプラン(熊本市高齢者保健福祉計画・介護保険事業計画)を

作成する際に実施したものでございますが、当該アンケートにおいて「参加していない」理由等については回答項目を設けておりませんでしたので不明です。

澤田会長：

このあたりは老人クラブの活動を通して、何か分かりますか。

山田委員：

老人クラブに参加が少ない理由として、やはり高齢者になりますと体力的に行事そのものに参加するのが苦痛になる。という1つの問題がございます。それと老人会そのものの活動に各自どのようなことを望んでいるのかという把握がなかなか難しいといったこともあります。そのような状況で、老人クラブの活動に満足感がないのではないかという感じはいたします。だから参加を呼び掛けても、老人会に入ること自体に苦痛を感じるという方向に走ってしまうというきらいがありまして、そういったところを、どう打破するのかと、我々の仕事であります。なかなかそのところの解決に対しての方法論が難しいなという感じはございます。

会長：

わかりました。ありがとうございます。

山中委員：

今お話しがありましたけども、65歳以上とか70歳以上の高齢者の方が、色々なサークルに呼び掛けても参加しないんですね。実際は、中に入っている人達は生き生きとしているわけなんですけども、それに入らない人は背中を向けるのです。その背中を向ける人を如何にしても、いろんな会に入らなくても、何かあったら自由な立場でそこに向かうようにできないかなと思えますが、皆さんやはり、何かに属しないとできないようなところがあります。だから中に入っている人が「私は女性部だけど、女性部ではないから今度ボランティアに行くから一緒に行こう。」と誘ったら来られるかもしれないけど、高齢者で色々サークルに「入らない・参加しない。」という面があるのではないかと、私はある一面ですけどそう思っております。

永田委員：

私は公民館の自主講座2つに参加しておりますけど、今お話しがありましたように、地域の高齢者の皆さん方を見てみると、呼び掛けとか、広報とか、何かきっかけや意識付けがなければ、「自分から参加する。」という気持ちになるのは難しいのかなと思います。自主講座に参加しますと、高齢者が多いのですけど、結果として自分の充実感・生きがいに繋がっていくわけですから、やはり皆さん生き生きしてます。そういった意味で、これからの超高齢化社会の高齢者を、どういうふう生きがいのある位置にもっていくか。この辺も含めて議論して頂けたらと思います。

澤田会長：

ありがとうございます。ちなみに永田委員のきっかけは何だったのですか。

永田委員：

私は67歳で職を退いた際、最初はほっとしました。「ゆっくり出来るな」と。そしたら半年くらいした頃から、どうもおかしいのですね。やる気が出てこないというか、「これでいいのかな。」と、「これから何年生きて、老後をどういうふうに毎日過ごせば良いかな。」と、ちょっとおかしくなりました。そこで「何かしたいな。」と思ひまして。小説家の佐藤愛子さんは88歳で最後の執筆をされた後「もういいだろう」と、ほっとしておられた時に老人性うつ病になりかけた、そしたら新しい仕事が出て、そしたら「蘇った」と、おっしゃってました。全くその通りで、そういったご老人、お年寄りが多いのではないのでしょうか。一生懸命働いてきて、そして退職して「良かったな」と思っていると、おかしくなってくる。だからそこにどういうふうに、ボールを投げていか、その辺を考えて頂けるなと思っております。

澤田会長：

ありがとうございます。非常に貴重なご意見だったかと思ひます。高齢者の数は増えていて、どんどん増えていく高齢者を、如何に社会参加に結び付けていくかというのが、非常に重要だと思ひます。この会で、そのあたりをまた皆さんのご意見を聞いていきたいと思ひます。他にございませんでしょうか。

西委員：

私の父のことなのですが、父はもう亡くなってありますが、先に母親の方が亡くなりまして、それまでは、母親の方が地域の婦人会というのに参加しておりました。それに任せて、父は全く1歩も地域のことは出て行かなかったタイプで、母が亡くなって父が1人になった時に「高齢者向けの色々な活動があるから行ってみたら。」と勧めたのですが「嫌だ。今さら。」という感じでした。特に仕事をずっとしてきておりましたので、辞めてから今さらコミュニティに入ること自体を拒否していた状態なところがありました。でも暫くしてから「パソコンをちょっとやってみたい。」「年賀状を書いてみたい。」と、そういうきっかけがありました。でもコミュニティではなくて、企業がやっているパソコン教室というようなところに、わざわざお金を出して行く。ですから、「男性の参加と、女性のコミュニティへの参加の仕方が違うのかな。」というのを伺ってみたいなと思ったのですが、いかがでしょうか。

永田委員：

先ほど申し上げました公民館の自主講座について言えば、参加者は圧倒的にほとんど女性です。2人くらいしか男性はいない。女性の方が地域のコミュニティに参加する抵抗感がなくて、男性は「もういいや。」となって、じっとしている。そんな感じがします。

小林委員：

もう亡くなっていますが、私も私の両親のことを思い出していたのですけれども、私の両親は熊本に5年前に東京から私と一緒に来たのですが、やはりある程度の年齢で移住をしてくると、一緒に育った仲間とか友達が全くいないので、地域とかコミュニティに繋がるきっかけがなかったんですね。熊本市の市報を読んで、色んなことを見たり聞いたりしていたみたいなのですが、どうもやっぱり一歩踏み出せない。仲間がいないというか一緒に行く人がいない。そんな感じで非常に躊躇していた気がします。だから、例えば退職後、よそから熊本に入ってきて全く訳も分からない状態であった時、とくにマンションみたいな所で生活していると、殆ど同年配の方達との交流する場がない。そういった人達をどうやって外に引っ張り出すかというのは、これから凄く大きな課題だと思います。

またもう1つ、私は学生と一緒に過疎化や高齢化が課題になっている地域に入ってフィールドワークをやるのですが、その時に接する高齢者の方は非常に生き生きと生きています。老人クラブに入っているわけでも、自治会で役員をやっているわけでもないのですが、若い学生達が入って「土地の食べ物を教えて下さい」とか、昔の郷土行事の準備の仕方を色々教えて貰うために色んな話をすると、本当に生き生きとされるのです。だから、このコミュニティのなかで、例えば老人クラブの活動や公民館の自主講座だとかそういったものではなくても、若者と接点を作ることが高齢者の方達が蘇る、というケースを凄く間近で見えていますので、そういった年齢層の違う人達が一緒になって活動出来るような場を、どうやって高齢者に提供するかということも、これから考えると良いのではないかという気がして聞いておりました。

山中委員：

私の校区は高齢化率も34%くらいと高いのですが、元気な高齢者でも、家の中に閉じこもってないで1人でも多く家から外に出ていただくのではないかとということで、全町内で、ふれあいいいきサロンというのを行っております。これは月に1回で開くのですが、「ただ100円玉を1枚持ってきて、それぞれの指定された公民館に集まって下さい。」ということなのです。私の町内では回覧板で2週間くらい前にチラシを配ります。また当日も9時頃、公民館に行きまして朝から呼び掛けを行います。近くにバス停があって、「病院は明日にしてきました。」という方もおられて、非常に和気あいあいとした会を開いております。でも、先程おっしゃいましたように男性の方が、なかなか少ないです。私が以前、民生委員をしていました時に男性の1人暮らしの方を存じ上げておまして、その方を何とかして出てきていただきたいなと思いついて、お誘いしたのですが「あんな所は女が行くと所たい。男は行かんでよかと。」と言われましたので「そんなことないですよ。男の方もいらっやっていますよ。」「多くはないでしょうが。少ないでしょうが。」「だけど1度覗いてみませんか。」と言いましたが「それでも行かん。」と。

それから、ふれあいいいきサロンからお金を少し出して、グランドゴルフをするようにしたのです。「では、グランドゴルフに行かれませんか。」と、そしたらグランドゴルフに来られて一生懸命されてる様子を見て「帰りにちょっと、ふれあいいいきサロンに行きましようか。」と誘

ったのです。「外から覗くだけでもいいですから。覗いて男が何人。女が何人。数えて帰ると面白いでしょう。」と。そしたら、ふれあいいいきサロンを覗きに来られました。だから「中に入らんね。」と「今日100円持ってきてない。」「100円、いらんいらん」と中に入れたんですね。そしたら眼の光が違うんですね。らんらんとなって話を聞く・体操をする・歌を歌う。私の町内は、ちょっとしたご飯とみそ汁と漬物を出してたんですが、それも食べられて「私はテレビを見ながら毎日ご飯を食べて、こがん美味しくない飯はなか。だけど、ここには御馳走はなかばってん5、6人で話しながら食べると、こがんご飯の美味しかったとは知らなかった。」と。以後、無欠席です。このことによって、「自分が何か若返った。」とおっしゃるのですね。後1ヶ月で94歳なんですけど、お家で畑も作っておられます。白菜とか1個400円くらいした時に、うちに持って来てくださいました。「これ私が作ったから是非食べて頂きたい。」と、畑も自分で作る気持ちも出てきたと。ですからそういう何かきっかけがあれば、特に男性の方々、尻込みしてなかなか出られないんですけど、ちょっとしたことで家から外に出て頂くという工夫は、これからも私の課題ではないかと思えます。

山田委員：

これは老人会の実情報告というような形になりますけど、失礼して言わせていただきたいと思えます。老人会の会議中に出てくるのが、資金難の問題です。老人クラブに対して市から助成金を出して頂き感謝申し上げますけれども、活動に使える金というのが非常に限られております。私達もなかなか難しいものだという事は理解しておりますが、先程も申しあげました魅力ある活動を行うために、どうしても絡みつくのが資金面の問題だということで、会議のなかで出た良い案でも、ある程度ボツにせざるを得ないということになっているわけです。

それから会場の問題で、「憩いの家」というのを老人クラブで管理いたしておりますけども、これが無人の為に各校区の老人クラブの会長にご苦勞をかけながら管理しているわけです。この「憩いの家」は市内に131施設ありますけども、冷暖房の設備が無いために、夏と冬は全く利用が無いというところもあり、水道代・ガス代・電灯料の経費を払うお金に苦慮しております。これを老人クラブの金から負担せざるを得ないんです。このように、色々と校区の会長には迷惑を掛けているところもございます。我々も努力を致しますけども、市役所の方にも色々とお願ひすることもあろうかと思えますので、よろしくお願ひしておきたいと思えます。

澤田会長：

ありがとうございます。他にございますでしょうか。

西委員：

花園にある障がい者施設に私の娘が通っておりまして、花園校区の婦人会の皆様方に本当にお世話になっておりまして、お祭りですとか、そういったのに呼んでいただいたりとか、或いは私どものふれあいの集いというのがあります。そこにも毎年来ていただいて、踊りをご披露いただいたり、とても楽しい日々を過ごさせていただいております。花園という地区は柿

原公園を中心にして、障がい者施設とか高齢の施設が固まっている所でございます。そういった意味では、高齢の施設と障がいの施設、或いは、地域の高齢の老人クラブですとか、そういったところの連携と言いますか、その様なところが確立している所ではないかなと、そういうふうな感じがします。街中と申しますか、マンションが沢山建っているような地域だと、そういったコミュニケーションを自治会でやるというのは、なかなか少ないのではないかなと思います。私の住んでいる校区では、一応そういったお知らせがマンションには貼られますけど、「地域に参加されている方が何人いらっしゃるかな」というような感覚しかございません。上手くいっている所を、もっとどんどん広げて、障がいと、高齢と、地域の皆さん方の連携、そういったものの展開の仕方というのが、これから大事ではないかなと感じております。

澤田会長：

ありがとうございます。他の委員から何かありませんか。

水野委員：

皆さんのお話しをお話伺いしてまして、来て欲しい人が来ない。来てくれない。というのは、何処もそうだなと思ひまして、今、被災者支援団体として仮設住宅などにも入っているのですが、その孤立支援という所でも、同じことが言えます。また、子供たちのことで考えると、PTAの総会とかで来て欲しい人が来ない。来て欲しい人が来なくて「もう充分勉強されてますよ」という方が集まられますので、本当に永遠の課題だなと考えながら、ここでも何らかのきっかけが作れると良いなと感じました。そして、お話しをお伺いしていると、地域の色々な場作りをされている。歩いて行ける所で、その場が沢山作られている。そのなかで皆さん方の社会参加というところに、バスの交通網とかが、どれくらい関係して必要になってくるのかなというところを考えていかなければいけないなということを感じました。

澤田会長：

ありがとうございます。交通事業者の立場から何かございますか。

池永委員：

先ほど説明がありましたさくらカードについて、事業者としては、ご説明があった通りの事業者の負担をしながら、この事業について、参加をさせていただいてる訳なのですが、バス事業を取り巻く環境というのは非常に厳しい状況にありまして、その負担のあり方についても、この場でご議論いただければというふうに思っておりますので、よろしくお願いをしたいと思います。

澤田会長：

ちなみにICカードに関して、例えば年齢に応じて金額が変わるとか、距離に応じて金額が変わるとか、柔軟な設定とか出来るのですか。

池永委員：

コストの問題がありますが、可能でございます。色んな設定が出来ます。地域外を跨ぐ場合もいちいち精算しなくてもよい、という事も出来るので、コストの問題です。

(了)